

心の山

2021. 11. 9

「SS先生、あの山、何ていうかわかる?」「吾妻山ですか」「間違っではない。春まで雪うさぎが見えた山だよ」「ああ、何ですかね」「上保原のK先生、あの山、わかる?」「吾妻連峰です」「んん、間違っではない」そこへ生徒指導主事のY先生が「吾妻小富士です」

「雪うさぎがあった山、小さい富士山のように見えない?」「ああ、そうですね」「まあ穴のようなものが見えるでしょ。あれが火口だよ。ぐるっと一周できるんだよ」「へえ」「噴煙が見えるでしょ。あれが一切経山」「噴煙なんですか。はじめて知った」「あの山は生きてるんだよ。危ないんだよ」「一つ一つの山に名前があるんだよ。まとめて吾妻山とか吾妻連峰」「へえ、吾妻小富士が吾妻山だと思っていました」

毎日、8時の時点で、外で登校指導にあたっているのが、この4人である。いつも、このような会話をしているわけではない。ある日のふとした会話である。

校舎に戻ってからY先生が、昇降口前に掲示してある写真のことを教えてくれた。そこには、吾妻連峰と安達太良連峰の写真と標高が示されてあった。野田中学校から見える範囲の山々である。

「この裏側に、西吾妻山というのがあって、2035メートルで一番高いんだよ。見えないけどね」「そうなんですか」「安達太良山も、一番高く見える山は箕輪山で、安達太良山は分かりにくから今度教える。箕輪山にはスキー場もある」「安達太良山、聞いたことあります」「智恵子抄って知ってる?ほんとうの空があるふくしまっていうでしょ。高村光太郎ね」「ああ、高村光雲の」「高村光雲を知っている。さすがだな」

概して、SS先生の反応は薄い。こういうことに興味がないということだろう。しかしである。3年ほどは福島にしているとす。毎日、登校指導をしながら、目の前に見える山の名前もなにも知らないまま福島を去るようでは寂しいではないか。

「K先生の山は半田山か?」「そうですね」人それぞれに、ふるさとの山がある。それは“心の山”であろう。きっとSS先生のふるさとにも心の山はあるのだと思う。その山を眺めると、「ああ、帰ってきたな」と感じるような。これが、海辺に育った人ならば、目の前に広がる海なのかもしれない。

吾妻小富士の火口を一周することができると、SS先生に教えた。だが、この前、何年ぶりかで一周した際に、体力が続かず、休み休みであったことは話さなかった。家人のほうが私よりも元気だった。運動をやめる、体を動かさなくなるというのは、こういうことかと身に染みた。こんな話をSS先生にしても共感は得られないだろう。

何気ない一日の何気ない会話ではあったが、意外とこういう話は覚えているものである。SS先生が、立派な教員として活躍するようになり、ふと福島のことを振り返ったときに、福島の人にとっての心の山、吾妻山のことを思い出してくれるだろうか。

いや、野田中学校のこと、出会った生徒たちのこと、そしてお世話になった先生方のことに思いを巡らせてくれることを期待したい。今の自分があるのは、野田中学校での日々があったからだと思ってくれればと思う。そう考えると、何気ない一日が、とても重要な意味をもった時間であることがわかる。SS先生にとっての心の山は吾妻山ではなく野田中学校である。それでよい。